
青空にキス

乃井村つばさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青空にキス

【Nコード】

N9825Q

【作者名】

乃井村つばさ

【あらすじ】

私は、親友のお兄ちゃんにキスしたかった。

天然唇フェチガールの恋物語！

第一話

「知ってる？ 一組に転校生が来たらしいよ」

「へえ。男子かな？ かつこいい人だといいいね」

あははは、と彼女たちは女子トイレを後にした。

ごめんなさい。私、転校生の青空真澄あおぞらますみは、女子生徒です。

個室から出て、手を洗ってから鏡で笑顔を作ってみる。大丈夫。ちゃんと笑えてる。私は、応接室へと戻っていった。もうすぐ二度目の高校デビューだ。

「青空さん、入っていいよ」

担任の桐谷愛美きりたにまなみ先生のその言葉にクラスがざわついた。私も、ゆつくりと教室へ入る。

「転校生の青空真澄さん。自己紹介してくれる？」

あ、はい、と私は顔を上げた。

「青空真澄です。漢字はそのまま、青い空に真実の真に澄むという字を書きます。青空じゃなくて、真澄って呼んでくれたら嬉しいです。よろしくおねがいます」

ぱらぱら、と拍手が起こる。クラス替えまで、あと三ヶ月ほどしかないけれど、このクラスに馴染まなくては。

先生に言われ、窓際が一番後ろの席に座った。すると、隣の女の子に話しかけられる。

「青空って、めずらしい苗字だね。でも可愛いと思うよ、芸能人の芸名みたい。……私、小嶋楓こじまかえで。あんたのことは真澄って呼ぶから、私のことも楓って呼んでね」

楓ちゃんが首を傾げると、耳たぶからピンクのピアスが覗いた。そういえば、茶色っぽい髪、白いカーディガン、短いスカート、化粧もしているという違反だらけの女の子だ。でも、話した感じだと

サバサバしていていい子だと思う。

「いい？ 楓。ついでに今から生徒会選挙の立候補を募ってるんだけど」

先生にそう言われた楓ちゃんは、明るく言う。

「私、出るよ。生徒会選挙。いいよね、愛美ちゃん」

「もちろん。じゃあ、前に出て何か一言」

愛美ちゃん、というのが桐谷先生のあだ名らしい。

先生の言葉に、楓ちゃんは堂々と前に出た。

「えー。生徒会選挙に立候補しました、一年一組、小嶋楓です。目標はただ一つ、生徒会会長になることです。みんなの意見の代表になれるのは私しかないと思っています。ぜひ応援よろしくお願ひします」

大きな拍手と共に、声援が飛んだ。楓ちゃんって、人気者なんだ。

「それで、提案なんだけどさ、」楓ちゃんは言った。「真澄を、生徒会立候補の責任者にしたいんだけど」

そんな楓ちゃんの提案は、すんなり通った。

「そうね、いいかも知れない。真澄も、学校に慣れるチャンスですよ。どうせ、責任者も決めなきゃならなかったんだし、真澄、頑張っつてね」

先生は、につこり笑った。私の名前を呼び捨てで呼んでくれることに嬉しくなった。少なくとも、このクラスには馴染めそうな気がしたから。

「頑張ります！」

私も、笑った。

*

*

*

「真澄、このあと、暇だったら生徒会室行こうよ」

そう楓ちゃんに誘われたのは、六限目の終わり。

「暇だけど、どうして？ まだ楓ちゃん、生徒会じゃないし、立候補者でもまだ行かなくて良かったんだよね？」

「ん。まあ、そうなんだけど。ちよつと用事があるんだ。一緒に行こうよ」

「うん、分かった」

間もなく鳴ったチャイムに、私たちは帰り支度をする。

「真澄はさ、彼氏とかいるの？ 遠距離？」

革の学生鞆に教科書を入れながら、楓ちゃんは言った。

「彼氏……は、いたんだけど、転校するからって別れた」

「じゃあ、まだ好きだったりするんだ？」

楓ちゃんは、楽しそうに顔を上げた。女子は、こういう恋バナが大好きな生き物だ。もちろん、私も。

「実は、転校するから、というのは口実で、本当は別れたくてしょうがなかったの」

「うそ。どうして」

「伊織いおりくんって言うんだけど、私、一目惚れだったんだ。唇が大好きで。でも、性格は最悪で。嫉妬深いものだから、嫌になっちゃって」

私の言葉に、楓ちゃんは苦笑した。

「なに？ 真澄って、唇フェチ？」

私は頷いた。男の人のあの薄い唇。下唇の影。少し上がった口角。そこから覗く白くて可愛い歯がたまらなく好きなのだ。

私は、楓ちゃんの少し後ろを歩いて、生徒会室に向かった。

一年一組の教室から、渡り廊下を行き旧校舎へ入る。そこに生徒会室があると楓ちゃんは言った。旧校舎は、多目的室が多く、授業としては滅多に使わない場所らしい。だから、生徒会室も大きいんだよ、と楓ちゃんは笑った。

「沙紀さん、こんにちわ」

生徒会室と書かれたドアを開けると、正面の事務用の机にボブカ

ツトの女の人が座っている。

「あ。楓、久しぶり。今日はどうしたの？」

「転校生の、青空真澄。今日から、クラスメイトなの」

楓ちゃんは、私を押し出した。

「よ、よろしくお願ひします」

「青空、真澄ちゃん？　すごく可愛い名前。いいなあ……私は、生

徒会長で三年の南沙紀。みなみさきよろしくね」

私は、ペコリと頭を下げた。

南先輩……とても、感じのいい人だ。会長というのも頷ける。

「ねえ、ちよつと、可愛くならない？」

「は？」

南先輩の言葉に、私の頭の中にハテナが飛んだ。楓ちゃんは、笑ってソファに座って手招きする。

「そうだよ、真澄。やってもらいな。沙紀さん、センス良いから」

南先輩は、自分の机の中から大きなメイクボックスを取り出したと、言うことは。

「さあ、座んなさい」

先輩に言われて私はソファへ腰を下ろした。実は、化粧はしたことがないので、内心ドキドキだった。

「女の子はね、可愛くなる努力は惜しんじゃだめなの。ちゃんと、努力した人には必ず幸せがやってくるでしょう？　きっと、誰かが見てるわよ。真澄ちゃんなんて、名前がこんなに可愛いんだから、名前負け、なんて言われないうにしないとね。大丈夫。顔立ちは美人さんだから。瞳も、綺麗なブラウンなのね。ただ、髪の毛がいけないわ。パサパサで広がっちゃってる。少し細いのね。こうしてね、髪の毛にも水分が必要だから、気を使ってあげるのよ。でも、癖っ毛なのかな、自然にウェーブになっているし、少し茶色の髪も可愛いね。少しハーフ顔だけど、そういう訳じゃないんでしょ？」

はい、と私は答えた。ハーフでもクォーターでもない。純血の日本人だ。

南先輩は、優しく私に触れた。まるで、操られているんじゃないかと思うくらい、優雅で余裕の手つきでメイクアップをした。

「できた。どう？ 楓。可愛くなったでしょう」

楓ちゃんは、私を見てからにっこりと笑った。

「うん、可愛い。すっごく似合うじゃん」

「そうかな……ありがとう」

照れくさくて、少し控えめに笑う。それと同じ瞬間に、ガラッとドアが開いた。

「お兄ちゃん！」

楓ちゃんは立ち上がった。生徒会室に入ってきた男の人に、楓ちゃんは抱きつく。

「楓？ ああ、久しぶり。ちよ、やめろよ。学校だぞ」

お兄ちゃんって呼んでいたから兄弟なんだろう。彼の顔を見て、私は少し恥ずかしくなっただけでうつつむいていた。

「純平。遅かったんじゃない？ まあ、今日はやることも無いんだけどね。それより、見て見て。彼女、今日転校してきたばかりなの。つい美人さんだったから、お化粧しちゃった。ねえ、どう？」

純平

南先輩は、私の肩に手を置いた。

「沙紀さん、誰彼構わずメイクをするのはどうかと思います」

純平と呼ばれたその人は、自分の事務机に鞆を置いた。

「でも、似合ってるわよ。ほら、真澄ちゃんも顔上げてったら。純平、あんたが来てから黙っちゃったじゃないの。可哀想に、ね、真澄ちゃん」

いえ、そんなことは、と首を振った。薄い唇。下唇の影。少し上がった口角。そこから覗く白くて可愛い歯。だめだ。私は、生唾を飲み込む。そして、ゆっくりと顔を上げると、案の定、唇に目が行ってしまふ。この人、私のフェティシズムをくすぐる唇をしてる

「わ、私、用事があるんだった！ 楓ちゃん、ごめん、私帰るよ！

南先輩、ありがとうございました！ し、失礼します！」

急いで立ち上がって、生徒会室を出た。とにかく走って逃げなければ。どうして逃げるのかと聞かれたら、そこに大好きな唇の持ち主がいるからだと答える。だって、そのままそこにいたら、すぐにもキスしてしまうかもしれないから。そんなことをして、転校早々嫌われるのは嫌だ。

「はあっ……はあっ……。もうだめ、走れない」

どれくらい夢中で走ったんだろうか。そして、ここはどこなんだろうか。

「……どうしよう。帰り道、分かんない……」

旧校舎は迷路のようだと、行きに楓ちゃんが言っていたような気がする。もともとは小さな校舎だったが、増築に増築を重ねて複雑な造りになってしまったのだという。

誰かに聞こうにも、旧校舎には職員室もないし、多目的室ばかりの旧校舎には、用でもなければ人はこないのだ。

「こんなことなら、楓ちゃんと連絡先交換しとくんだった……！」

私はとりあえず、来た道を戻って生徒会室に向かおうとした。あの男の人と会うのは嫌だったけど、そうしなければ、私は帰れない。でも、夢中で走ってきた私には、どこを通ったという記憶もない。厳密に言えば、どこも同じような風景で、ずっと同じところを歩いているような気持ちになる。

季節は冬。もうすぐ冬休みが始まる季節。外は薄暗いし、廊下は寒い。

「どっしり……」

とうとう諦めて、近くの多目的教室に入った。電気をつけると、どれほど外が暗いのかを思い知る。

わたしは机突っ伏した。今日は、本当に疲れる一日だった。

第二話

「あれ、真澄？　ねえったら、大丈夫？」

いつの間にか寝ていたようだ。揺り起こされて伸びをする。外は真つ暗だ。時計六時を大きく回っている。そうだ、私、迷っちゃったんだ。

「楓ちゃん……良かったあ、帰れないかと思ったよ」

楓ちゃんは、ため息をついた。視線を楓ちゃんの後ろにやる。

「……！」

私は急いで目を逸らした。

それに気づいた楓ちゃんは、不思議そうに首を傾げてからドアに寄りかかる彼に話しかけた。

「お兄ちゃん、先行ってて」

「え、ああ。分かった、じゃあな」

楓ちゃんは手を振って、姿が見えなくなると、またため息を付いた。

「私の実の兄なんだ。藤沢純平ふじさわじゅんぺい。小さい頃に両親が離婚してさ、姓は違うんだけど。なかなか格好良くない？　真澄は、嫌い？」

私は小さく首を振った。

「なら、いいんだけどさ。何か訳があるなら話してみなよ。力には、なれないかも知れないけど」

そう楓ちゃんは言ってくれたけれど、なんて言えばいいんだろう。楓ちゃんのお兄さんの唇に欲情しました、とでも？　そんな事言ったら、いくら楓ちゃんでも引くに決まっている。

私の言葉を待っている彼女に申し訳なくなって、立ち上がった。

「そんなんじゃないよ。ごめんね、迷惑かけちゃって」

「ああ、いいよ、別に。有り難いと思うんなら、今度うちに遊びにおいで」

行こう、と歩き出した楓ちゃんの後が続いた。帰り道は、私が思

つてた方向と逆だった。

「真澄、あんた、どんな唇が好きなの？」

ぎくりとした。多分、自然な流れで聞いただけなんだろうけど、さっきの事があったから。

「薄くて、だけど柔らかさうな下唇の影と、少し上がった口角ですよ。あと、そこから覗く小さくて白い歯」

想像したら、興奮してしまった。

「ねえ、もしそんな人が現れたらどうするの？ 眺める？ 触る？」

「そ、そんなんじゃない！ キスしちゃ、う、かも……」

私は興奮しすぎて、余計な事を口走ってしまった。楓ちゃんを見ると、ニヤッと笑っている。

「何でしょう？」

「私、分かっちゃった」

「な、何がですか……？」

恐る恐る聞いてみると、楓ちゃんは、小さな声で言った。

「さては真澄、お兄ちゃんに欲情したな？」

「な……！」

「私さ、勘は鋭いの。頭の回転も早い方なんです。ほら、真澄、どうなの？」

私は、ゴクリと喉を鳴らした。

「ど、どうして分かったの？」

楓ちゃんは、まるで謎解きをする探偵のように腕組みをした。

「簡単なことだよ。あんた、興奮すると唇触る癖あるでしょ。あと少し目が潤む」

あれ、と思った。そんな事、自分では自覚が無かったからだ。でも私は、黙って彼女の謎解きを聞くことにした。

「放課後に生徒会室を飛び出す直前も、ずーっと唇さわってたし、泣いてんのかな、と思った。まあ、この時点では不思議には思わなかったよ。でもさっき、旧校舎でお兄ちゃんに逢ったときも、急に同じ感じになった。んで、今聞いた話でも、同じ状態だったし、

ああ、確かにお兄ちゃんの唇、そんな感じかもなあって」

楓ちゃんの間人観察力に脱帽した。もしかしたら、私分かり易いだけなのかも知れないけれど、私の気持ちを言い当てられたことが恥ずかしくて顔が一気に熱くなる。

「ご、ごめんね！ 私、別に楓ちゃんのお兄さんを好きになつたりしないから」

「何言つてんの？ 別に好きになつたつていいんじゃない？ お兄ちゃんつて結構モテるんだけどさ、なぜだか、誰とも付き合おうとしないんだよね」

なんでだろうね、と首をかしげる。そんな話をしている間に、いつの間にか昇降口に来てしまった。

「か、楓ちゃん！ どうしよう」

「え、な、何？」

「帰り道、覚えるの忘れた。また、帰れなくなつちやう」

私は頭を抱えた。また、迷子になるのだけはごめんだ。

「馬鹿。あとでちゃんと、地図でも書いてあげるから。まったくもう、今度は探しに来ないからね」

「あ、ああ、ありがとうございます」

まだ少し新しいローファーに履き替えて外に出る。すっかり空は夜だった。

「今日は、ありがとうございます。本当に。これから、よろしくお願ひします」

私は別れ際、改めて頭を下げた。

楓ちゃんはキョトンとしてから、カラカラと笑った。

「うんうん。挨拶は大事だよ。こちらこそ、よろしく。じゃあ、気をつけて帰るんだよ」

ばいばい、と手を振って、楓ちゃんは走って行ってしまった。どうやら、楓ちゃんのお兄さんが待っていてくれたみたいだ。本当に、優しい人なんだな、と思った。

私の家は、高校から歩いて十分、住宅街ある。夢のマイホームと

いうわけだ。家に帰れば、まだ新しい匂い、部屋や廊下には、片付けきれっていないダンボールの山が待っている。

私は、星が綺麗な空を見上げながら帰った。

*

*

*

どうしよう。どうしたらいいんだろう。

「……………どうしよう」

私は、リビングで髪の毛を梳かしながら、つぶやいた。

時間は九時を少し回ったところ。大好きな、このドラマに出ている主役の俳優さんの唇を見ても、興奮しなくなってしまった。

というのも、お風呂であれこれ考えていたせいなのだ。楓ちゃんのお兄さん、藤沢先輩のことを考えていたら、なんというか、あつという間に好きになってしまった。

あの有名な、夢に出てきた人が、次の日から気になって仕方がないという法則だ。

「……………どうしたらいいんだろう」

何度目か分からない疑問の言葉をつぶやいて、リビングを出た。

相変わらず、チョロいというか、簡単に恋に落ちてしまうというか。その割りに、幸せになれる恋なんて、そうそう経験はないのだけれど。

自分の部屋のベットに倒れこむと、すぐに睡魔がやってきた。疲れやすい方だ。私は、この眠気が覚めない前に、電気を消して、布団にもぐりこんだ。

第三話

通学路。同じ制服の生徒たちが歩いていく。

前の学校では、基本的にみんな自転車通学だったから、新鮮な光景だ。

「青空さん、おはよう」

「あ、お、おはよう」

下駄箱にローファーをしまいながら、同じクラスの人かな、と首を傾げた。でもまあ、私の名前を知っているのだし、そうなんだろう。そう思っていると、彼女は笑った。

「私、同じクラスの上原。青空さんの席の前の」

ああ、と私は頷いた。

「ごめん」

「ううん、しょうがないよ。じゃあね、教室で」

ばいばい、と手を振って、私も教室へ向かう。教室への行き方は、ばっちり覚えた。

「あっ……」

やってしまった、と思っても今更遅い。学生鞆に入りきらなかった、私の新品の教科書が入った手提げバックの持ち手が破れてしまったのだ。

一気に学校に置いてこよう、なんて考えなければ良かった。

「あああ、私の、教科書たちが……ごめんなさい、ごめんなさい……」

あたふたと、教科書をかき集める。これを、どうやって教室に持っていくのかが問題だ。

右手には、重い学生鞆。左手の腕には、ジャージが入った袋。

「大丈夫？」

急いで顔を上げる。神様かと思った。

「教科書、バラバラになってるけど……？」

彼は、しゃがみながら私を見て、はっとした。

「青空、真澄だ」

ん？ 私は、首を傾げた。誰だ、このマスク男は。校章の色が私とは違う黄色だから、確か二年生だと思っけど。だとしたら、私はそんなに有名になったのだろうか。

そんな私を見て、彼は少し笑った。どうやら、顔に出やすい女らしい。

彼はマスクを取った。

「……分かった？」

「……！分かりました！分かったのです！」

私は急いで彼にマスクを付けさせた。危ない。マスクをつけて唇を隠していれば、多少は平静を保っていられるらしい。

「フジ、フジタ……じゃなくて、えっと」

「藤沢」

「そう、藤沢先輩」

そう言っただけの方を見ると、笑顔がすぐ近くにあった。

「化粧ってすごいな」

教科書に付いたゴミを取るように軽く叩きながら、藤沢先輩は言った。

「え？」

「昨日と少し顔が違う」

そういえば昨日は、放課後に生徒会長の南沙紀先輩に、化粧をしてもらっていたのだった。

それなのに、私だと分かってくれたのは嬉しかった。

私は黙っていると、先輩は教科書をまとめて立ち上がった。

「ひとりじゃ持てないだろ？ 俺、持ってく」

「そ、んな……！ 大丈夫ですから」

「もし落としても、もう助けないよ？」

「う……」

楓ちゃんと、同じ事言ってる。さすが兄弟だな、と思った。

そんな事を考えていると、先輩は歩き出していた。私は、追いついてからお礼を言う。

「ありがとうございます。迷惑かけちゃってごめんなさい」

すると、また昨日の楓ちゃんと同じような顔でキョトンとしたあと、ケラケラと笑った。

「いいよ。やりたくてやってんだから」

ケホケホ、と小さく咳をする彼に私はあまり彼の方を見ずに言った。

「風邪、ですか」

「ああ、うん」

そういえば、少し鼻声な気もする。

「……あ、飴、舐めます？」

私は手袋を外して、鞆を探っていくつか飴を取って渡した。

「まじで？ あ、ありがとうございます。喉痛かったから……ちょうど良かった」

少しだけぎこちなくなった気がしたけど、別に気にも止めなかった。

クラスについたので、机に教科書を置いて帰ろうとする先輩の後ろから、聞き慣れた声が出た。

「何？ 昨日はあんなにぎこちなかったのに、ずいぶん仲良くなったのね。良かった良かった」

「わっ！ 楓ちゃん」

「か、楓っ！」

驚いて大きな声を出した私たちを見て、楓ちゃんはケラケラと笑った。

「そんなに驚かないですよ。お兄ちゃんは、早く教室戻った方がいいんじゃない？ 私が登校してくる時間って基本的にギリギリなんだよね」

時計を見ると、確かにギリギリだった。

「あの、ほんとにありがとうございます」

ぺこりと頭を下げる。

「ごつちこそ、ありがとな。じゃあ、また」

そう言って、先輩は戻っていった。元気よく手を振る楓ちゃんの横で、一気に力が抜ける。

「びっくりしたあ」

「ずいぶん、自然だったじゃん。やればできるんだね」

「ち、違うの。マスクしてたから」

否定した私に、楓ちゃんは、ふと苦い顔をした。

「風邪ひいちゃったみたいね。昨日、帰り待たせちゃったからだよなあ、悪いことしちゃった」

「ごめん」

「なんで真澄が謝るの？」

「だって、私のせいで、先輩を外で待たせちゃったんだよ」

そういうと、楓ちゃんは、やっと合点がいったように頷いた。

「なるほどね。でも、先行ってって言ったのは私だし、真澄、お兄ちゃんといるとキ」

「わあああつ！」

私は、急いで彼女の口を塞いだ。

「なに」

「なにって……楓ちゃん、お願いだから言わないで。内緒にしてて」

ああ、ごめん、と楓ちゃんは両手を合わせた。私は、そろそろと息を吐いた。

*

*

*

今日は、いい天気だ。

お昼の後の授業は瞼が重い。腹の皮が張ると瞼の皮が緩む。その原理で、隣の楓ちゃんは爆睡。他のみんなも机に突っ伏していて、

いつもより視界が開けている。

私が全く眠くないのは、外の体育をしている男子の中に、藤沢先輩を見つけたからだった。

あの素敵な唇が、私の名前を言った。あの唇が、私の名前に動いた。それを考えただけで、爪の先まで甘く疼く。

風邪をひいているのに、体育に参加しても大丈夫なんだろうか。あの唇が苦しく歪むのを想像して、また心の中で悶えた。ふと、先輩がこちらを見たような気がして、恥ずかしくなって私も机に突っ伏した。

今日も、生徒会室に行きたいなあ。

第四話

「こんにちわー」

「失礼します」

私は楓ちゃんと、生徒会室に来た。今日は遊びに来たわけではなく、生徒会選挙のエントリーをしに来たのだ。

広い生徒会は、いつもより賑やかで、生徒会の人たちもバタバタと動き回っている。

「あ、藤沢先輩の名前」

ホワイトボードに書いてある立候補者の名前の中に、藤沢純平、の名前もあった。

「ああ、お兄ちゃん来年は三年生だからね。会長狙ってんだって」ということは、会長を狙う楓ちゃんとはライバルということだ。でも……

「楓ちゃんはまだ一年生なのに、会長になれるの？」

「ああ、うん。役職は学年関係なく、投票数で決まるの。だから、投票数が一番多ければ、会長になれるんだ」

楓ちゃんは、説明しながらエントリーシートに記入した。私も署名をすると、ふとある女の人に目が行った。綺麗というよりは可愛いフランス人形のような人だ。

「中森ひより。二年生だよ」

楓ちゃんの声に我に返る。

「彼女の事見てたでしょ？ 可愛いし愛想いいし、男子に人気あるらしいね」

「楓ちゃんは、好きじゃないんだ」

「やだ、分かった？」

あちゃー、と額に手をやってから、楓ちゃんは続けた。

「なんか、男に媚びてる感じがするんだよね。でも、あれが素なわけない。絶対、裏がある」

まあ、確かに同じ女として、彼女の態度には少し嫌な感じはするけれど、悪い人だとは思わなかった。

「中森ひよりも、立候補したみたいね。やだ、一緒に活動したくない」

「か、楓ちゃん、言い過ぎだって」

私は彼女をたしなめた。ごめん、と謝りながら会長の所へ向かった。

「沙紀さん」

「ああ、楓、と真澄ちゃん」

「こんにちわ、と会釈する。」

「エントリー、お願いします」

楓ちゃんは、エントリーシートを南先輩に渡した。

「はい、確かに。頑張ってるね、楓」

「うん。あれ、ねえ今日お兄ちゃんは？」

「そういえば、藤沢先輩の姿が見えない。」

「純平なら、調子が悪いみたいで、エントリーだけして帰った。会わなかったんだ。すごかったわよ、喉もガラガラでツラそうだった」

「やっぱり、体育がいけなかったんじゃないのかな、と思った。」

「沙紀さん、私、心配だから帰るね。また今度。行こう、真澄」

楓ちゃんは、少し急いで私の腕を引っ張る。

「楓ちゃん？」

私と呼ぶと、彼女は腕を放して、ごめん、と言った。

「お兄ちゃんは、お父さんと暮らしてるんだけど、今日はお父さん出張で帰ってこないんだ。大丈夫だとは思っけど心配で」

「そうなんだ、と相づちを打つ。私も、心配だった。」

別れ際、楓ちゃんは少し落ち着いてきて、冗談を飛ばしていた。

「こんなに心配するなんて、ブラコンかな？ そんなんじゃないんだけどなあ」

「ははは、と笑った。」

「楓ちゃん」私は少し迷った末に言った。「これは伝えなくていい

んですけど、その……お大事にしてください。明日から休日だからゆつくり休んでください。今日は嬉しかったです、ありがとうございますございました」

それだけ言っつて、私は背中を向けた。楓ちゃんは、ふふふ、と笑っつて、こつこつ言っつた。

「伝えちゃうからね、ばいばい」

*

*

*

休日は忙しかつた。

自分の部屋の整理や片付けをしていると、あつという間に一日が終わる。

「明日は、晴れかなあ」

西日が強い。明日から生徒会選挙の選挙活動が始まる。

私も気合いを入れて、また部屋の片付けに取り掛かつた。

時折、藤沢先輩の事が気になつて、楓ちゃんに連絡しようと思つたけど、どうにか思い留めた。もし、先輩の看病などしていたら、邪魔になつてしまうから。

そう思つていたのに。

「一日寝てたら治つちやつてさ、昨日は一日お兄ちゃんとゲームしてた。白熱だつたなあ」

月曜日、さり気なく聞いた私に楓ちゃんはさらりと言つた。

「なんだあ。治つたなら、そう連絡してよ……」

私は脱力した。あんなに心配で、片付けがはかどらなかつたのに。

「ありがとう、真澄」

「え？」

楓ちゃんは、ぼんつと私の頭に手を乗せた。

「お兄ちゃんの事、心配してくれてたんでしょ」

「いや……ち、ちが」

「否定しなくてもいいじゃんよ。お兄ちゃんも、喜んでたよ、真澄の言葉伝えたら」

一気に体温が上がる。不意に、笑った先輩の綺麗な唇が頭に浮かぶ。

「あ、真澄、また唇触ってる」

そう言われて、急いで手をもぎ離す。なるほど、確かに唇を触るのが癖なのかも知れない。目が潤むのも、条件反射なんだろう。

「いいと思うけどな。この前の二人、良い感じだったし。そろそろお兄ちゃんも、誰かと付き合ってほしいなあ。そうすれば、私のブラコンも治るかも」

「無理だよ、私なんて」

「謙遜しない。なるようになるんだから、私は心配しないよ」

「……う」

なるようになるのなら、多分先輩が私を、なんてことはない。だって二年生には、中森ひより先輩みたいな、フランス人形みたいに可愛い女の子がいるからだ。

そんなことより、と楓ちゃんは言った。

「今日から選挙活動、よろしくね、真澄」

手始めに、この後控えている体育館での演説。私はドキドキしながら聞いた。

*

*

*

体育館に集まる生徒をステージ袖から覗いて息を呑んだ。大きな高校だとは思っていたけど、まさかこんな大勢の前で演説をしなくてはいけないなんて。それも、一番始めに。

「つて、あんたは演説しないでしょ。何緊張してんの」
楓ちゃんは、私のおでこを小突いた。

「でも……楓ちゃん、」

「私は大丈夫だから。それに、これが全てじゃない。真澄は、ここのでちゃんと私を見てて」

そう行つてから、彼女は笑顔で歩いて行つた。

ざわざわしていた生徒たちは、楓ちゃんの演説が始まるとシンと静まった。

「本当に、学校が楽しいですか？」

決して下を見ず、ハッキリと話す彼女に私の目は潤む。これは、興奮してるんじゃない。

「感動した？」

不意に上の方から声がする。見上げると、藤沢先輩が私の隣で演説する妹を見ていた。

私は慌てて涙を拭いて頷いた。

「はい。……とても」

そう答えた私に、先輩はニコツと笑つた。

「自慢の、可愛い妹だよ。あいつは、誰かの役に立てるなら、なんでもやる。昔から、正義感の強い、優しい子なんだ」

「……分かります」

私はもう一度涙を拭いた。

目の前には、演説が終わって大きな拍手に包まれた楓ちゃんの姿があつた。

「先輩も頑張ってください」

私は、ステージ袖に戻ってきた楓ちゃんに駆け寄つた。きつと、二人とも大丈夫。

第五話

ある日の放課後。

「やってらんない！ 帰るよ、真澄」

楓ちゃんの機嫌が悪い。彼女は私の手を引っ張って校舎へ向かった。

「どこいくの？」

「生徒会室に決まってるでしょ！」

楓ちゃんの機嫌が、ものすごく悪い。

私は、彼女に連れられながらもう一度後ろを見た。

原因は、

中森ひよりだった。

「有り得ないよね、ねえ尚ちゃん」

生徒会室に着いてソファアに座った私たちに、お茶を出してくれた楓ちゃんの幼なじみで同じクラスの南尚久みなみ なおひさくんに言った。

彼は、会長の南沙紀先輩の弟で、よく生徒会の雑用をしてくれるらしい。

「尚ちゃんは、やめてくんない。……で、なんでお前は怒ってるの」「なんでじゃない！ なんなのあの女！ 選挙活動でどうして手作りのクッキーを一人一人食べさせてるの？ 賄賂よ、ワ・イ・口！」興奮する楓ちゃんの説明では分からないらしく、南くんは助けを求めるように私を見た。あのね、と私は言った。

放課後、選挙活動として声掛けをやっていた。すると、何人もの取り巻きを連れた中森ひより先輩が現れたのだ。彼女も立候補者の一人。

あ、ねーえー。あたし、クッキー焼いてきたんだあ。はい、あーんして

中森ひよりに、一票よろしくお願いしまーあす。はい、あーんおいしい？ 美味しいよ、ひよちゃん。キャッキャッキャと、彼女とたくさんの男子たちは騒いでいた。自分の可愛さを分かって

いるんだろつ。

「……なるほどね」

南くんは腕組みした。

「こんなの、有り得る？ 何なの、あの甘えた声！」

まあまあ、と彼は楓ちゃんをなだめる。

「彼女らしいな。さすが、自分のセールスポイントを分かっているしやる。まあ、いいんじゃないか？ 今年は、期待の純平・楓兄弟がいるから、なかなか票も取れないと思うし」

それにしたって！ と言う楓に、南くんは続けた。

「大丈夫さ、楓。あの女が、どんな手を使ってたって、そんなの一時の支持だ。お前へ信頼は揺るがない。気にしないで、楓に出来ることをやれよ」

ガラツと生徒会室の扉が開いた。

「お、尚久もいる」

入って来たのは藤沢先輩だった。フェチの事は、だんだん免疫がついてきた。要するに、意識しなければいいのだ。

「尚ちゃん、付き合ってくんない」

先輩が入って来た途端に、楓ちゃんは南くんに言った。

「付き合うつて、何処へ」

「自販機。ミルクティー買って」

「やれやれ、と首を振ってから、彼は楓ちゃんに続いて出て行った。……」

気付けば二人きりになった部屋で、沈黙。そんな時ほど、先輩の口元を意識してしまう。

「……お！」

私の言葉に先輩が顔を上げた。

「……お？」

そう聞き返した先輩を見てしばらく言葉を失う。

「おおお、お茶、飲みましゅか」

噛んでしまった。ゆでダコみたいに真っ赤になった私を見て、先

輩は優しく笑ってくれる。

「うん、飲む」

ドキツとした。一瞬、脈を打つのを忘れたみたいだった。

「青空さんは、兄弟いる？」

震える手でお茶を置いて座る。

「はい、下に三人」

「お、大家族だ」

先輩はそう笑ってから、お茶を飲む。ゴクリと、のど仏が動いた。

「でも、当たった」

「え？」

「一番上のお姉さんだと思ってた。青空さんって、しっかりしてるから」

そう言っつて、私を見た。思わず言ってしまった。

「下の名前で、呼んでいただけませんか？」

え？ と言う顔の先輩に慌てて手を振る。

「いや、あの……青空って苗字嫌いなんです。だから……あ、私の下の名前は」

「真澄」

「え」

「可愛い名前だと思って覚えてたよ。青空真澄」

先輩の口角がキュツと上がる。そんな笑顔、反則です……せめて、触りたい

無意識に彼の唇に手を伸ばした。すると、先輩は伸ばした手を優しく掴む。彼も無意識だったのだろう。二人同時に、火傷した時のように過剰に飛び退いた。

「や、あの」

私が口を開きかけた時、生徒会室の扉が開いた。もう一度飛び上がる。

楓ちゃんだと思って振り向けば、そこに立っていたのは中森ひより先輩だった。

「藤沢くん、これ、良かったら食べて。作ってきたの。選挙、一緒に頑張ろうね。二人で当選したいなあ、ねえ藤沢くん」

ひより先輩は、例のクッキーの詰め合わせを藤沢先輩に渡した。

さり気なく手を握って、これでもかというほど可愛い笑顔を見せた。

「……ああ。ありがとう。一緒に、頑張ろうな」

「うん！ じゃあ、あたし帰るけど、藤沢くん気をつけてね。ばいばい」

そう言って、部屋を出て行く。帰り際に、私の事を睨んで行ったような気がした。

「そのクッキー……」

楓ちゃんが見たら怒りそうだな、と思った。南くんは、ものすごく当たっていたから。

「楓は、中森の事気にしてるからなあ」

カラカラと笑った。

「さつきイライラしてたのも、彼女が原因だろ」

コクリと頷くと、先輩はクッキーを鞆に仕舞って言う。あとで食べるんだと思うと、少しチクリとした。

「昔から、楓は気に入らない事があると尚久に八つ当たりしてたっけ。尚久は、言いたいことは言うけど、ちゃんと話を聞け。アイツにだけ、愚痴を言うんだ」

「きつと信頼してるんでしょうね」

「ああ。楓って強がる癖があるから、気持ちの寄りどころってやつかな」

そういつのって、いいな。と思った。

第六話

今日は、生憎の雨だった。

「青空真澄さん、いる？」

昼休みに、鼻にかかったような甘えた声の持ち主がやってきた。

「……はい」

楓ちゃんは、そっぽを向く。 私は立ち上がってドアの近くに行
った。

「あ、いたいた。ふうん。よく見たらそうでもないのね」

「は？」

「あ、ううん。なんでもないの」

中森ひより先輩は、私を階段下の死角に引つ張っていく。

私より少し低い身長。私も、どちらかという小さい方だ。

そんな事を考えてると、彼女は私を見た。

「あたしね、藤沢くんが好きなの。あなたは好きな人いない？」

「……」

私は答えに困った。

「別にいてもいいの。藤沢くん以外の男の子に興味ないもん」

それがどうした、と思った。こんな話をするために、私を呼んだ
のだろうか。

「藤沢くんも、きつと私以外の女の子には興味ないんじゃないかな

あ

だって私可愛いもん、と髪の毛を触る。

「じゃあね。青空真澄さん」

残された私は、ただ彼女の真意を見つけようとした。

*

*

*

「新聞部、瓦版だよ！ はい、どうぞ」

放課後、大変な事になった。

「藤沢先輩と中森先輩って付き合ってたんだ。なんか納得」

「お似合いだよねー」

「まさに世紀の大カップル！」

そんな言葉たちとすれ違いながら、私と楓ちゃんは新聞を握り締めて生徒会室に向かった。

別に私は、藤沢先輩が誰と付き合いおうと、それで構わないと思っただ。それが先輩の好きな人なら、中森先輩でも。

「お兄ちゃん！」

「楓？」

どうした？ と先輩は顔を上げる。きつと瓦版の事を知らないんだ。

「どういうこと？」

わざと音を立てて机の上に新聞を置いた。

「……な、んだよ、これ」

先輩は驚きを隠せないように立ち上がった。後ろから、南くんが覗き込んで読み上げた。

「『世紀の大カップル誕生！』？ 純平、中森ひよりの事好きだったのかよ。ご丁寧に抱き合ってる写真まであるけど」

「間違いだ……新聞部に訂正するように言ってくる」

先輩が生徒会室を出ようとした瞬間、それを阻むように中森先輩がドアを開けて立った。

「中森……」

「なんか、大変なことになってるね」

「ごめん。今すぐ訂正するように言いに……」

「行かなくていいじゃん！」

シン、となった。

中森先輩が、藤沢先輩に抱きついたから。

「行かなくていいよ、藤沢くん。もう遅いよ」

「でも……中森、」

「あたし、藤沢くんが好きだよ。だから、ねえ、いいでしょう？
付き合っちゃえば……」

「うわあ、と小さく南くんが言う。私も複雑な気持ちだった。本当
を言えば、ここから逃げ出したかった。」

「付き合っちゃえば、嘘じゃなくなるよ？」

抱きついたまま、彼女は上目遣いに先輩を見た。

「お願い、中森先輩の体を離して。そんな事を思ってしまう。」

「ちよつと待てよ」

南くんが言った。

「その新聞はガセって事だろ？」

「ガセじゃな」

「そう、間違えだ」

藤沢先輩がぴしゃりと言った。

「だったら、この抱き合ってる写真は何なの。これ、教室だよな。
確かに、純平と中森ひよりだけだ」

確かに、この写真を見てると二人は付き合っていると誤解されて
も可笑しくない。

「どうでもいいじゃない！」

中森先輩が叫んだ。泣いている。

「どうでも、いいじゃん……ねえ……藤沢くん、あたしじゃだめ？」

中森先輩は、大粒の涙を流した。

「ずっと、中学校の頃から好きだったよ。ずっと、藤沢くんだけを
見てた。あなたの為に可愛くなったの」

「……」

藤沢先輩は黙っている。

「……私が一番藤沢くんが好きだよ！ 藤沢くん……ねえ」

「ごめん」

掠れて上擦った声が聞こえた。

「え」

中森先輩は耳を疑うように怪訝な顔をして彼を見上げた。
私も、びっくりして顔をあげた。

「ごめん、好きな人がいる」

「……好きな人って、誰よ」

中森先輩は一步後ろに下がって、涙目で睨みつける。

「……」

「言えないの？ 藤沢くんは気持ちはその程度？ そんなの」

「真澄だよ」

「え」

そう言ったのは私ではなくて、中森先輩だった。

ちよつと待って。

「青空真澄が好きなんだ。だから、彼女に誤解されたくない」

ちよつと待ってよ。

よく、分からない。先輩の言っている意味も、今起こってる事も。

「あ、ちよつと真澄！」

楓ちゃんの声聞きながら私は、いつかのように駆け出していた。

勢いよく開けたドアが跳ね返る。

嬉しくないの？ 私、先輩の事好きだったじゃない。

違う。私が好きなのは、先輩の唇なんだ。『藤沢純平』という人

間が好きじゃいけない。もともと、そうじゃないか。

でも、今は我慢できない。私は思った。先輩の唇が、誰かの名前

を呼ぶ事が。だからこそ、疑ってしまう。先輩、さっきの言葉

は本当？ 中森先輩を振るための口実？

私は旧校舎の屋上の扉を開けた。

外はこんなにも静かで、こんな雨の薄暗い空の下でもゆっくりと
時間を重ねている。

雨も気にせず、そのまま座りこむと長いため息をついた。

「……」

キィ、と錆び付いた屋上への扉が開いた。

「……真澄」

この声は。ゴクリと喉が鳴った。雨の音も雫も、今は気にならな
い。

「来ないで！」

私は叫んだ。先輩の足が止まる。

「……また、風邪引きますから……放っておいてください」

私は、抱えた膝に顔をうずめた。

すると、ぱたりと雨が止んだ。音は聞こえるのに、と顔をあげる
と傘を差した先輩と目が合った。

「何考えてるの？ 今、真冬だよ。おいで、行こう」

手を差し出す先輩に、私はいやいやと首を振った。

「さつきは、ごめん」

先輩が謝った事に、私は傷付いた。嘘じゃなかったら、きっと謝
る必要がないと思っただから。

私のすぐ隣に座りこむ先輩は、すぐに続けた。

「でも嘘じゃない」

私は膝に頬を預けた。

「本当に、真澄が好きだ。……でも、迷惑なら俺は、……！」

唇が触れているだけのキス。

私は先輩から唇を離して言った。

「私も、先輩が好きです。でも、私が好きなのは先輩の唇であり、
歯です。ずっと、こうやって触れたかった。それでも私が好きです
か」

先輩は目を見開いたまま、少し止まった。私はまた顔をうずめた。
キスしたい衝動が止まらなかった。もし嫌われたとしても、少し
苦しいけど、構わない。

「右手の甲」

先輩の手に、え、と顔をあげた。

「小指の下にホクロがあるだろ」

私は、自分の手の甲を見ると確かにホクロがあった。

「最初は、真澄のその手の甲しか見てなかった。だから、いつからこんなに真澄っていう人間を好きになったかは分からない。でも、他の人を真澄以上には想えない。こんな俺は、嫌い？」

先輩は私の右手を取って、私を立たせた。

「真澄」

ぼたりぼたり、とスカートや顎、髪の毛から雫が垂れる。きっと、最悪な顔をしてる。

先輩は、すっと片膝を付いて、私の右手の甲のホクロにキスをした。キザったらしい姿も、先輩には似合う。

「ずっと、こうしたかった」

愛しそうに手の甲を触る先輩に私は思わず頬が緩んだ。

「ずっと彼女を作らなかつた理由は、これですか？」

「ああ。……笑う？」

私は被りを振った。

「笑いません。私も、私だし」

「絶対後悔は、させないから。一緒に、一緒にいる理由を探せばいい」

いつの間にか止んだ雨に、もはや意味を成さなかつた傘をたたんで、私に言う。

「真澄が好きだ。……お前は？」

雲が途切れて、突然差した太陽に目がくらむ。

眩しそうに目を細めた先輩の言葉に、私ははっきりと言った。

「先輩が、大好き」

第七話（前書き）

遅くなって申し訳ございません。まだまだ続きます。

第七話

「ハ……ツクシヨン！」

二人で屋上から近い教室に入って暖房を入れた。

「先輩、また風邪引いちゃいましたね」

「すいません、と頭を下げた私の頭に、ぽんつと手を乗せた。

「風邪なんて、すぐに治るよ……ここ」

先輩は、隣の椅子に座るように招いた。

先輩が南くん連絡したから、もうすぐタオルを持って来てくれる。

「中森先輩は……」

どうしたんだろう。

そう言おうと先輩を盗み見ると、何とも言えない顔をしていた。

「中森が、俺のことを特別に想ってくれてた事、気付いてなかったわけじゃないんだ」

先輩は遠くを見ながら話した。

「中学の頃は、もっと大人しくて目立たない子だった。けど、無口とかそういうんじゃないやなくて、結構話したりしたんだ。中森が俺の友達を好きになった時、かなり相談に乗ってさ」

きつと、先輩は今と変わらずに優しくてかっこよかったのだろう。心変わり、したのかもしれない。

「あの写真は、去年入学したばかりのときに撮られたんだと思う」

あの写真、というのは瓦版に載っていた抱き合ってる写真だろう。

先輩はゆっくりと話を続けた。

藤沢くん……

中森と二人きりになった教室で、彼女は言った。

藤沢くん、やっぱりダメだった

え？

告白、したの。でもやっぱり、上手く行かなかったよ

そうだったか、と俺は口を噤んだ。彼の気持ちも知っていたから、何とも言えなかった。

でも、これで良かった

彼女は、瞳いっぱい涙を浮かべて笑った。

これで、また次の恋ができるの……ねえ藤沢くん

俺は彼女を見た。

お願いがあるの。少し……泣かせて……

すでに涙声になった彼女は、俺の胸に飛び込んできた。まさか、失恋して傷付いている彼女を突っぱねる真似など出来るはずもなく、そのままじっとしていた。

十分もすると、彼女は静かに体を離して、お礼もおさなりに、身を翻して行ってしまったのだ。

「でも、なんで今更、一年前の写真が？」

「さあ、分からないけど……」

私の問に、先輩は首を傾げた。

「中森ひよりの作戦だろうな」

急に聞こえた南くんの声に、驚いて振り返る。

「南くん……ありがと」

タオルを受け取って、ぐっと顔に押し付けた。

「ここ、置いとくから」

そう言って、南くんはココアの缶を机に置く。

「尚久、中森の作戦って？」

先輩が言った。

「さっき聞いたんだ、彼女から。あの写真を撮られたのは偶然。純平が好きだった中森は、その写真を譲ってもらった。そして、純平と生徒会で一緒に活動したくて立候補したんだけど、あんたは青空

真澄しか見てない。真澄も純平しか見てない事に気付いて、新聞部に依頼したんだって。彼女、泣きながら帰ったよ」

それを聞いた先輩は、息を吐いた。

「でも、それのおかげで二人は無事めでたし、でしょ」

南くんの言葉に、かあつと顔が熱くなった。

そんな風に言われるのは少し照れる。最初から、こんなのは予定になかったのだから。

「良かったな、純平」

南くんは近くの机に座ると、ネクタイを緩めた。

「おかげさまで」

先輩は私の肩を抱き寄せると、生乾きの髪をかき上げておでこに唇を当てた。

「わ！ わわわ、先輩！ 止めましょう」

私は堪らなくなつて自分の唇に指を這わせた。

「ごちそうさま。さて、俺は戻るわ。邪魔しちゃ悪いし、楓が一人で待ってるから」

「ありがとな、尚久」

ひらひら、と手を振って教室から出て行った。

「み、南くん……！」

今は行かないで欲しかった。二人きりになると、暖房の音がやけに大きく聞こえる。恥ずかしくなつてタオルに顔を埋めるけれど、先輩は何でもないように言った。

「空が、綺麗だ」

先輩の言葉に、ふと顔を上げる。雨上がりの空は澄んでいて、とても綺麗だ。

「青空真澄。俺の大好きな四文字熟語」

先輩はニイツと歯を見せて笑ってから、南くんが置いて行った缶を開けた。

「よ、四文字熟語って……」

私かわざと頬を膨らませると、その頬を突つつきながら言う。

「ほんと。だって、綺麗だと思わない？ あの空」

ああ、空の事が、と少しがっかりする。そんな私の心を覗いたように、先輩は私の顔を両手で挟んだ。

「……魅力的だと思わない？ まるで大空みたいだな、真澄の笑顔」

「……私の笑顔？」

「そうさ」先輩は笑った。「真澄が笑うと、全て許せる。出会えて良かったよ」

クスツと笑って引き寄せられる。

「……先輩が好きなのは、このホクロでしょう」

少し恥ずかしくなって、憎まれ口を叩いた。

「それは単なるきっかけだよ」

ギュツと抱きしめる力を強めて、彼は言った。

「今は真澄が大好き」

ああ。どうしよう。私

「今が一番幸せです」

「なあに。これから、その一番を塗り替えてやるよ」

第八話

私は、彼の唇から目をそらせずにいた。

「なに？ 俺はそんなつもりじゃないんだけど、キス、する？」

だめだ、近づいてくる彼の端正な顔に抵抗できない。でも……

「……真澄！？」

勢い良く開いた保健室の扉から、純平くんがこっちを見てる。

もう限界だった。そのまま彼の肩に倒れこんだ私は、慌てて駆け寄ってきた純平くんの呼びかけを遠くに聴きながら、気を失った。

*

*

*

「かーいーちよう」

私はざわざわとした校舎を抜けて、生徒会室へと向かう静かな廊下を小走りで行く。大好きな彼氏、藤沢純平くんが前を歩いているから。

「会長って呼ぶなよ。まだちょっと、くすぐりたい」

恥ずかしそうに頭をかく彼に、何度も「会長」と言っておあげる。

「真澄……最近、遠慮がなくなってきたよね」

「そんなことないよー。純平くんと話すと、毎日毎日よだれがたれそうです」

「うら」

なんて愛しい時間なんだろう。大好きな純平くんの、大好きな唇から、私に向けられた言葉を聴くたびに、それに触れたくなる。

「今日は？ 生徒会室で、何か手伝うことある？」

私は彼に聞いた。憂鬱になっていた去年までと違い、今年は純平くんのおかげで楽しい毎日を送っている。

生徒会に入っていない私は、お手伝いとして放課後はいつも生徒会室に通っていた。前の会長の沙紀先輩も卒業をして、いまは新生徒

会にも慣れてきた六月。じめじめした空気に、毎日が

「うん。今日は、七月の球技大会の看板作りとかするから、手伝ってくれる？」

「もちろんよ、まかせといて」

私は、すぐそこに見えた生徒会室の扉を駆け寄って開ける。

「こんにちはー」

私は、楓ちゃんと南くんの後姿を見つけて声をかけた。

「真澄、いいところに来た。ちよつと来て」

楓ちゃんに手招きされて、私は生徒会室の長椅子に座った。

「どうしたの？」

「ん。ちよつとき、鶴折るの手伝ってくれない？千羽鶴作りたいんだ。真澄、鶴折れるよね？」

テーブルを見ると、すでにたくさん鶴が折ってあった。

「千羽鶴作って、どうするの？」

私が聞くと、楓ちゃんは言った。

「この部屋に飾るんだよ。だから、生徒会の安泰を祈って折ってね」
はい、と折り紙を渡す楓ちゃん。

そういうことなら、と張り切って折ったつもりなだけで。なにしろ、折り紙なんて小学生以来やっていない。

「真澄……」

覗きこんだ南くんが、私の折った鶴を空にすかして見せる。

「不器用なら不器用って言っとけよな。これ、折り目が合っていないじゃないか」

あはは、と楓ちゃんが笑った。

「それにこれ、ちよつと折り方間違ってるでしょ。この鶴だけ、羽が小さい。……ほら、ここをこうするの」

ごめん、と頭を下げると、なおも楓ちゃんは笑った。

「いいのいいの。ちゃんと気持ち込めて折ったんだよね？マイペー
ースな真澄らしくてよろしい」

私は折るのをやめて、楓ちゃんと南くんの折り紙を折る手を見た。

二人とも、ぴたつと綺麗に折っている。

「ほら、そのこの3人。生徒会の仕事もしろよ」

藤沢くんの呼びかけに、きりのいいところで鶴の作成は終わりにした。

「この看板なんだけど、こっちの黒い画用紙を文字の形に切って、貼り付けてもらいたいんだ。カッターは、これを使って。怪我しないようにね」

はい、とそれぞれの作業に入っていく。私もカッターで文字の作成をすることにする。

外の雨に気づき、中森ひより先輩のことを思い出す。藤沢くんに告白した中森先輩は、断られたとたんに生徒会立候補を辞退した。中森先輩の抜けた枠に、南くんが立候補してめでたく生徒会役員になったのだ。会長の藤沢くんが続いて、僅差で楓ちゃんが副会長となり、南くんは書記、それからあと二人、三年生の柴田先輩も書記、中村先輩が会計となった。二人とも良い人で、私のことも歓迎してくれているし、私と藤沢くんのこと、藤沢くんと楓ちゃんの間関係も知っていて、気を使ってくれる。今日は二人はまだ来ていないみたいだ。

「痛っ……!!」

傷に気付くと急に痛くなるのは、一体どうということなんだろう。人差し指が切れていて、これは間違いなくカッターの仕業だと思っただたる血に、近くにあったティッシュを何枚か引き抜いて、藤沢くんに近づいた。

「ん？ どうした、真澄」

顔を上げた藤沢くんは、私の心臓より上に上げた左手と、人差し指を押さえたティッシュの赤さから、どうしたか察したようだった。「なんか、ちよつとやつちやつたみたい。保健室、行ってくるね」

「俺も……」

そう言った藤沢くんに、私は首を振った。あまり迷惑をかけたくない。これは私がぼーっとしていたから悪いのだ。

「大丈夫だよ。保健室に行つて消毒とかしてもらうだけだから。すぐ戻つてくるね。ごめん、ありがと」

生徒会室から出ると、小走りで保健室へ向かった。この旧校舎から、新校舎の保健室までは結構な距離がある。少し遠回りになることは知っていたが、確実に覚えている道を通つて保健室へと向かった。また迷子にでもなつたら、今度こそ呆れられてしまう。

保健室へ着いた私は、呼吸を整えてからドアをノックした。

「どうぞ」

男の先生の声だった。そういえば、四月から新しい保健室の先生が赴任してきたのだった。前は、親しみやすい綺麗な女の先生だったのだけど、新しい先生とは、ぜんぜん関わつたことがない。

「失礼します」

ドアを閉めて振り返つたとたんに、その唇に釘付けになった。

「どうした。指、怪我したんだろ。早く座らないと、治療できないな」

甘くて低い声が、私に座るように促す。

「はい……」

私はティッシュをゴミ箱へ捨てて、指を先生に見せた。

「なに？ カッター？」

私の手を引いて、水道まで導く。先生は私の後ろから覆いかぶさるように、指を洗つた。こんなにかっこいい先生じゃなかったら、これは間違いなくセクハラだ。

「でも、良かったね。そんな深い傷じゃない。まあ、傷跡は残るだろうな」

私をもう一度椅子に座らせると、消毒液で指を拭う。

痛くないわけではなかったが、私の気持ちは今、指ではなく先生の唇にあつた。薄くて綺麗な唇。今すぐに触りたい。そこまで思つて私は自分を叱咤した。私には、藤沢くんという素敵な唇の持ち主がいるのに。

「終わったよ」

でも、もう私の気持ちは止まらなかつた。

「なに？ 俺はそんなつもりじゃないんだけど、キス、する？」

「はっ!？」

先生の言葉に、大きな声を上げてしまった。

「だって、そんな色っぽく唇見つめられたら、ねえ。キスしたいんだと思われてもしょうがないんじゃないの？」

ゆっくり近づいてくる彼の顔。私は、はっと気付いた。彼が近づいているんじゃない。私が近づいているんだ。でも、私には止められなかつた。

「先生とキスしたって、内緒だからね」

耳元で小さくささやかれて、足が崩れそうになる。

「……真澄!？」

この声は、間違いなく藤沢くんだった。

ごめんなさい、そう言つて先生から離れようとした瞬間、力が一気に抜けた。先生の肩に寄りかかるように倒れた。どう頑張つても、力が入らない。男の人の声がしたのは分かつたけれど、もう何も考えられなくて、それっきり、なにも覚えてない。

目覚めたときには、保健室のベットに寝ていて、藤沢くんが心配そうに見つめていた。

「藤沢くん……」

私の言葉に、彼は安堵のため息をついた。

「心配させないですよ。だから、一緒に行くつて言つてたのに」

「私……」

「貧血だつて。カッターで指切っちゃつたし、血が結構出たみたいだし、ショックだったんじゃない？ 今は大丈夫？ 気持ち悪いとか」

私は小さく首を振る。そうして、ベットを囲むカーテンの向こうの先生に、藤沢くんは私が目覚めたことを告げた。

「大丈夫だとは思うけど、気をつけて帰つて。彼に送つていってもらいなさい」

先生はこっちは来ずに言った。

行こう、と藤沢くんは私の肩を抱いた。最初はふらついたけれど、普通に歩けるので彼と手をつなぐだけにする。

「ありがとうございます」

保健室を出るときに先生のほうを見てみたけれど、キスのことなんてなかったかのように、けらっとしていた。

「はい、お大事に」

保健室のドアを閉めて、昇降口へ向かった。

藤沢くんは、確かに見ていた。未遂だったけれど、私が先生とキスしようとしているのを。でも、なにも話をしてくれない。もし、彼にそのことを言われたら、否定はしないで、素直に謝ろうと思っているのに。

私の家の途中まで来て私は、ここでいいよ、と立ち止まる。

「そっか。じゃあ、気をつけて。家帰ったらメールして。心配だから」

いつもの口調だったし、いつもの笑顔だったけど、どこか違う藤沢くんを引き止めることもできずに、家についた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9825q/>

青空にキス

2011年7月21日03時48分発行